九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

河野敏「正豊炭砿の憶出」

畠中, 茂朗
早鞆高等学校 : 教諭

https://doi.org/10.15017/1515779

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 30, pp.111-123, 2015-03-20. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【資料紹介】河野敏「正豊炭砿の憶出」

畠中茂朗

解説

貝島炭礦株式会社は社長・貝島太市の決断により、日中戦争期の一九三七年に日本軍の華北占領地へ進出することになった。華北占領地（中華民国）での拠点として中国側と貝島側との合弁企業である井陘炭礦株式会社（資本金は、貝島炭礦と同額の三〇〇〇万円）を設立し、本社を北京（北平）に置くとともに同社のもとで、井陘炭礦・正豊炭礦・六河溝炭礦・石門骸炭工場の三炭礦と一工場を経営した。

貝島の華北進出は一九三七年一一月に先見団として、貝島炭礦取締役の草場義夫を団長とする第一次派遣員を中国へ送ったことから始まる。派遣員は草場の他、満永寅一（副団長）、稲川大助、宮島庚子郎、河野敏、後藤理夫の総勢六名で、その後も数度にわたって貝島炭礦から華北へ人員の派遣が行われた。こうした貝島炭礦の華北進出の経緯や事業展開等について詳しくは、拙著『貝島炭礦の盛衰と経営戦略』（花書院、二〇一〇年）を参照されたいが、第一次派遣員の宮島庚子郎が著した『井陘時代』が、『石炭研究資料叢書』第三一輯（九州大学記録資料館、二〇一〇年）に「宮島庚子郎氏関連資料」として所収されている。

さて、本稿で紹介する河野敏「正豊炭砿の憶出」は、宮島庚子郎とともに第一次隊として華北へ派遣された河野敏が戦後に綴った思い出の記であり、便箋に万年筆で書かれたものである。河野は一九三七年一一月二三日（「正豊炭砿の憶出」による）から貝島を代表して華北占領地に所在する正豊炭礦の管理を担当することになり、井陘炭礦株式会社の設立後は、正豊炭礦長として同炭礦の維持・管理に全身全霊を傾注した。しかし、同資料からも窺われることであるが、日本軍の占領下といえども本業の石炭採掘よりも、ゲリラ等の襲来に備えることが職務の第一であったようであり、治安の維持に如何に腐心していたかが同資料から垣間見ることができ、執筆にあたっては宮島の『井陘時代』を参照した箇所も見受けられる。

「正豊炭砿の憶出」は河野が一九三七年に華北へ派遣されてから、一九四六年に内地に引き揚げてくるまでの約九年にわたって正豊炭礦に

在勤した際の記録であり、帰国後は、貝島炭礦に復職した。

この度の資料紹介は、河野敏の子息である河野拓夫氏から提供を受けたものであるが、拓夫氏が父敏の履歴をまとめた「府君河野敏略歴」も併せて紹介する。拓夫氏は小学校時代の一時期を父敏とともに中国で過ごされており、その当時の思い出も書かれている「府君河野敏略歴」を、「正豊炭砿の憶出」を補完する資料として紹介するものである。

なお、河野拓夫氏は一九三一（昭和六）年に直方で生まれ、小学校時代の数年間を中国で過ごし、帰国後は宮田町の貝島炭礦の社宅で生活されている。地元の鞍手高校から東京大学工学部に進学し、東大卒業後、八幡製鉄（のち、新日本製鐵）に入社。同社取締役を経て、黒崎窯業の代表取締役社長を勤められている。

注

①資料の中で明らかに間違いと断定できる箇所は訂正している他、適宜、句読点を入れた。

②資料中の炭礦・炭砿・炭鉱・炭坑の文字の違いは、原文のママとした。

「正豊炭砿の憶出」

河野　敏

昭和十二年七月七日、盧溝橋事件を契機として日華事変が勃発した。満州から移駐した日本軍は破竹の勢いで京漢線を南下し、十月初めには石家荘（後に石門と改称）を陥れ、一部は分れて正太線を西進、娘子関を突破山西省の太原に向い、井陘、正豊の両炭砿を接収して軍管理工場とした。

正豊炭砿は明治から大正時代に中華民国の大総統の地位におられた段棋瑞氏の実弟が独逸国と合併して経営されていた炭砿で強粘結有煙炭、発熱量八千カロリー弱の製鉄用の優良炭砿であった。

昭和十二年十一月、陸軍省より貝島炭砿会社に井陘、正豊両炭砿の管理、経営の協力を求めて来たので、貝島会社は第一隊として草場団長、満永、稲川、宮嶋、河野、後藤の六名を、十一月七日門司港を出発せしめ、第二隊として数日後、山内、堀江、大江、井上、山本等七名を派遣した。

第一隊は九日大連着、十一日北京着、十二日豊台より軍用貨物車に便乗、沿線到る所に敵の塹壕、砲撃の跡、敵兵の遺棄死体等生々しい戦場の跡を見つつ十四日石家荘着、直ちに興中公司弁事処にて打合せをした。当時石家荘に日本人が約五百名存在、その内、三百人は内地人及び朝鮮人の軍慰安婦という。

十一月十八日漸く許可を得て、正太線の軍用貨車の貨物の上に便乗、三時間半後井陘県駅に到着、当日は井陘兵站支部の給与をうけて、近く

の民家に宿営した。

翌十九日、兵站部の好意により軍用トラックの特派を受け、雪降りの中、途中積雪泥路に車輪がめり込む等困難を克服、後で名づけた大島峠を越へ漸く井陘炭砿に到着した。炭礦には興中公司からの斉藤氏、原氏等、又満鉄からの西尾氏外数名が既に派遣されていて管理、調査の任務について居た。

十一月二十三日、河野は正豊炭砿管理の任命を受け、単身、井陘より正豊炭砿に赴任した。同砿とは既に前任者の興中公司より二名の派遣員が居たが、二名は河野到着の翌日離礦したので、日本人は河野唯一名で、学校時代収得のカタコトの支那語を唯一の頼りとして、炭砿の要人即ち李鉱師、常経理、王煤師、段煤師（明専卒）、常煤師補、揚庶務主任、杜倉庫主任、呂工作主任等と折衝して管理を進めた。

然し最急務は警備のための日本軍の駐留であり、井陘炭鉱駐留の大島小隊長や、井陘兵站支部長等に懇請したが目的を達しない為、遂に河野は石家荘に乗込み、軍特務機関や日本軍石家荘司令部に出頭、緊迫の状況を説明、特別の取計いを懇請して十二月六日正豊に帰鉱したが数日後一個分隊の派遣を受け、炭鉱警備の愁眉を開いた。

正豊炭礦にて　（1941年6月頃）

中央：河野炭礦長　左：中国人巡査

記録によれば十二月中頃から段々と治安状況が悪化して来た。即ち

○　昭和十二年十二月十二日　微水駅敵襲を受け、我方に戦死一名、負傷五名

○　同年十二月十七日　頭泉駅襲撃され、我方戦死十一名、重傷三名、駅舎全焼

○　同年十二月二十五日　井陘新坑に匪賊侵入されしも、三個分隊出撃し排除す。

○　井陘炭砿への匪襲回数（十二年十二月から十三年迄）

井陘炭砿宮島砿長の記録

年　月別	井陘本坑	井陘新坑	鉄道破壊
12年12月	12	0	1
13年 1月	7	7	0
2	17	3	3
3	8	2	2
4	6	7	4
5	7	4	7
6	3	4	1
7	2	4	2
8	3	4	6
9	3	4	1
10	2	2	1
11	1	2	0
12	1	2	1

○　井陘炭砿の十三年二月二十八日から二十九日にかけての大敵襲は遂に鉱所内に侵入、西大楼は占拠放火され、皇軍に戦死一、負傷一の重大な被害を受けるに至った。

○　正豊炭砿も井陘と同様、漸次匪襲が激化して来たが、十四年夏、河野は社命により（井陘工作課勤務の井上君と共に）河北省臨城炭砿の調査に出張留守中、正豊は敵匪により攻撃、鉱所内に侵入されたが、駐留の皇軍警備隊は、数名いた日人社員、及び鉱警隊を指揮下に入

れ、之を撃退したが、残念にも皇軍に尊い戦死者一名の被害が生ずるに至った。これより漸次日本人社員を鉱警隊に増強した。

○　百団対戦　十五年八月二十日から二十三日にかけて、山西省を本拠とする共産軍により、正太線全面にわたり一斉に各駅を襲撃し、殆んどすべての鉄橋を破壊して、月余に亘り正太線を不通とした。この時井陘、正豊も共に包囲に陥って、所謂百団対戦があったが、我が正豊炭砿は皇軍警備隊及び礦警隊、日人社員の堅い防戦により、砿所内の侵入を防ぎ、幸いにも炭砿及び人身の被害はなかった。一方、井陘炭砿は百名以上の敵に侵入され翌朝排除したが、終日包囲を続け、新坑は三日間も占拠されたが微水より応援隊、討伐他行中であった所、中隊本部の帰砿により之を排除し、吾が飛行機により敵本部を爆撃する。

○　正豊炭砿防禦施設は十三年頃より、鉄条網、電流網、塹壕、トウチカ、地下壕、最後には迷彩等漸次強化されていった。

○　対米英宣戦布告　昭和十六年十二月八日　全員一致協力銃後の護りを固む。大詔奉戴日には　正豊神社前に日人集会、君ヶ代、詔書拝読、交代で決意を披瀝す。

○　大出水災害　昭和十七年六月二十三日午后一時頃突如一段坑内四層煤延先より大出水起り、坑口より一〇六米地点以下は浸水、出炭不能となり、復旧対策に全員没頭す。幸いに死者一名もなし。原因調査に興亜院、北支那開発会社等より来鉱されたが不可抗力と判定され、雪花山坑の外、新に二号井、北斜坑、南斜坑、周家坑を開坑し、昭和十八年十一月三日には井陘県域付近に民興斜坑を開坑し、又白彪坑を堀り、出炭増に全員奮励努力す。又十九年二月、民興竪坑を開坑する。

○　出水復旧案研究の為、河野は常磐地区の炭坑の止水の実績を視察の為、十八年五月より内地出張、その結果、出水箇所真上の白彪地区にボーリングし、セメントによる閉塞工事に着手す。敗戦により完工に至らず引揚げしは残念であった。

○「全山一家」の大標識を竪坑の大櫓上に掲げ、日華全従業員の協力を推進す。

○　十八年六月二十三日　出水一周年記念行事として、日華全従業員、国防婦人会、小学生等一同参集し、反省会を開催後、出水炭デー、選炭作業、炭砿構内の清掃奉仕作業を行い、有意義な感銘の一日であった。

○　十八年八月二日、三官廟献額行事。炭礦北方にそびえる海抜八〇〇米の三官山の山頂に鎮座する三官廟は、井陘、正豊盆地一帯の鎮守の神である。我々は日華一体となり、大東亜戦争の完遂、永遠の平和、全部落の繁栄、炭砿復旧の完遂を祈願する為、三官廟に献額を行った。献額は三枚で、共に黒漆地に金文字の大額の見事なもので、中央の横額が本額の「道乗万世」で之を挟み竪額の右は「輔天地掌肅穆祀三官頼赫赫神功復興事業」、左には「同種族共文化日化原一脹仰昭昭靈爽永保和平」と書かれてあった。この献額の行列は、日華従業員、家族、部落民が続き、赤、黄、青等の幟が額をのせた輿を中心に進み、先頭と中ほどに二組の雅楽隊が鐘、太鼓、笛とピーヒャラ、ドンドンと進み、各部落の辻々には村の長老連中がよそ行きの衣服を着し、檀を設け香を焚いて祝って呉れ、全部落民が沿道に佇立し礼拝し、終って列につき、善男善女の数は漸次増し、延々として続く行列は十数丁の長きに及んだ。この日沿道、山嶺には先発の鉱警隊の猛者連中が厳然として護衛の任にあたって呉れた。この行事の盛大さは曽て無かっただ

らうし、未だ部落民は覚えて居るだろう。両民族の善隣に大きな効験をしただろう。

○　漢方薬を無料施薬し善隣の助けとした。

○　月報「三官」の発行　創刊号（18・5・24）二号（18・6・24）三号（18・8・20）発行　内容は「副社長訓示」、「大詔奉戴日に際して」、「皇軍将兵に劣らぬ心を以て」、「正豊初夏の訪れ」、「帰国報告」、「トーチカ生活の実態」、「全山一家」、「山本元帥を憶う」、「出水一週年行事記事」、「兵営生活三日間」、「野球試合記録」、「庭球部便り」、「善隣について」、「三官山紀行」、「会社創立三周年記念行事」、「相撲大会」、「皇軍慰安演芸大会」等、「俳句会」も

○　18・10・25

民興斜坑起工式　（1943年11月3日）

右：河野炭礦長

長岡隆君寮に於て自殺―有為な青年を自殺させ、責は私にあると残念でたまらない。御親父は従前通り福岡県内に御健在、八十五才(?)で非常に御元気で、時々御訪ねしている。

○　18・10・31　井陘炭砿の皇軍慰問団、北部平山県近くにて遭難十名。

○　昭和十八年度出炭　計四一四、〇〇〇屯。

○　〃　19・1・26　吉田豊、佐藤、田島招集さる。

○　〃　19・2・19　民興竪坑開坑。

○　昭和19・2・20　恩田、浅倉応召す。

○　〃　19・3・10　正豊在郷軍人は大島峠に向かって演習。

○　〃　19・6・22　正豊駐留皇軍警備隊堀田中隊長殿威州方面討伐中戦死さる。

○　〃　19・7・13　死亡社員藤原金雄、若栗利男、鎌田政登、長岡隆君等の盆会追悼会。

○　〃　19・9・3　剣道鍛錬会、一位屋代、二位西島、三位住吉、四位有本、五位中山

○　〃　19・10・16　白彪ボーリング場襲撃され新谷君重傷。

○　〃　19・11・18　敵機三機正豊炭砿に襲来し、三分哨、汽缶車銃撃さる。

○　〃　19・12・16　北支方面並に興亜院、北支那開発会社に於いて華北夏期特別増産運動の成果につき表彰あり、正豊は輝しき栄光に浴した。

一等　正豊炭砿（賞金三万四千円）

二等　一位井陘　二位華豊

三等　一位開灤　二位博山　三位富家灘

個人表彰

永田博（正豊）　山本清（井陘）　磯野（六河溝）

○〃 20・8・15　大戦終戦の玉音ラジヲ放送を礦長室前の廊下に整列し、警備隊、日華社員と共に拝聴して涙をこらえる。

○〃 20・8・16　炭鉱クラブ大広間に日人従業員並に全家族を集め、炭砿長は声涙下る所感を述べ、臥薪嘗胆十年にて我日本国は必ずや復興すべしと予言し、大いに自粛自重し奮起すべしと訓示す。

○　以　後　三民主義青年団は跋扈し暴れまわるも、今迄の相互の理解と、友好、善隣、鉱警隊幹部の掌握により大なる動揺なし。

○　仝　通訳鮮人高宮君は何者かにより拉致され、惨殺、雪花山竪坑底に投込まれし由、同人妻石堀なつ子さんは、幼児三人を引連れ茨城県に引揚ぐ。無事なことを祈る。

○　仝　蒋介石総統は日本人の生命財産の保護につき温き命令を下し、終生忘ることなく感謝す。

○〃 20・9・1　河北省井陘鉱務局より、河野敏、後藤理夫、沼沢清（後解除）は残留を命ぜられ、後、河野は井陘鉱務局第二鉱廠長（正豊のこと）を命ぜられる。

○〃 20・12　日人は残留を命ぜられた者を除き石門に引揚げ、後、豊台、天津等に長期引留められ、幾多の艱苦を越えて二十一年春過ぎて漸く故国に引揚ぐ。

○〃 21・4　河野、後藤は漸く残留を解除され、井陘の加藤、石門の乃美氏等と共に石門を引揚げ天津収容所に滞留す。

○〃 21・6・13　塘沽港よりL・S・Tに乗船、漸く中国を離れる。

○〃 21・7・19　引揚船は、黄海洋上、朝鮮仁川沖にて停留、朝鮮よりの最後の日人を乗せ、博多湾にてコレラ待ち等一ヶ月余の後、博多湾に上陸無事故国の土をふむ。福岡師範学校学生の温い引揚者援護の親切に感謝し、日本に帰ったと深い感動を覚える。

後記、何分正確な記録がないので、あちらこちらの断片や、記憶等を切り張りにしてまとめたもので、抜けや、誤りがあるかも知れません、不悪。悪筆御免

府君　河野敏　略歴

河野拓夫

（この一文を戦中戦後の困難な時期を乗り越えて、私たち子供を一貫して強い意志と温かい愛情をもって育んで下さった父敏と母キヌの霊前にささげる。注…〝府君〟は自分の父又は祖父を敬っていう言葉）

敏は明治三四年（一九〇一）一二月二日、父直吉・母タケの長男として大分県速見郡杵築町北台にて生まれる。

大正八年三月、大分県立杵築中学校卒業、第一八回。同級生に小川鼎三（後の東大医学部教授）がいた。日本は明治二七～二八年の日清戦争、明治三七～三八年の日露戦争に勝って国内では大陸進出の意気大いに上がる。その中で目立った産業もない杵築の田舎から、敏は青雲の志を抱

いて旅順工科学堂（後の旅順工科大学）採鉱冶金学科に進学した。黒の詰襟の制服にはＭＭのマークがついていた（Minning&Metallugy の略）。幸い別府の山田耕平氏の学資援助を受ける事ができた。この事について父母は終生感謝の念を持ち続けていた。耕平氏の娘婿相原一郎氏は昭和電工勤務（常務？）で拓夫が東大生のころ工場見学に訪問したことがある。夫人のスズさんとはずっと年賀状を交換していたが平成二〇年ころ亡くなった。

旅順は日露戦争の結果日本の統治下となり、日本政府はそうそう工業専門学校を設立（明治四二年）。これは日本でも数少ない四年生工科専門学校だった（明治専門学校も同じ四年制）。初代学長は白仁武で彼はその後、官営八幡製鉄所長官として活躍した。丁度その頃ドイツ人技師ルオスキー氏が八幡で技術指導をしていた。

北九州市で三年前、北九州市と大連市との友好都市締結三〇周年記念交流会がひらかれた。記念パーティーで挨拶を頼まれた拓夫は次のように述べた。

私の父河野敏は今からほぼ九〇年前、旅順工科学堂で学びました。そして今日の友好都市三〇周年記念交流会で息子の私がこうしてご挨拶をしています。私は旅順との不思議なご縁を感じます。三〇年後もこのような交流会が催され、私の息子がご挨拶する事があるかもしれません。

私の話が終わったとたん一〇人ほどの人たちがわっと駆け寄ってきた。その中に旅順博物館の館長さんが居て握手を求めてきた。旅順工科学堂は現在博物館になっているそうだ。その方からは今でも年賀状を頂いている。

大正一二年三月、旅順工科学堂を卒業。同年四月、大手の三菱鉱業（株）に入社し、方城炭砿に勤務。方城は当時の三菱炭鉱で最大の鉱業所だった。同年、宇都宮キヌと結婚（母キヌは明治三七年九月二五日、大分県別府市で出生。大正一一年、大分第一高等女学校卒業）。

大正一三年一一月二三日、長女浩子出生。この頃、方城炭砿でも落盤事故、ガス爆発などが発生。

昭和六年、筑豊石炭鉱業組合救護訓練所に入所。炭鉱での石炭採掘が大規模化するにつれ、明治末期にはガス爆発、落盤事故などが度々おこり安全の確保が緊急の課題となっていた。この問題に対処するため、明治四三年筑豊石炭鉱業組合直方会議所が救護訓練所を設置した。父敏はこの救護訓練所で昭和六年から昭和一二年までの六年間勤務し、熱心に仕事をした。その模様は『直方救護所四〇年記念誌』に詳しく書かれている。以下の文章は記念式典時救護所長だった毛利氏の記念式典でのご挨拶にあるものの抜粋である。

昭和九年四月に組合は組織を変更して社団法人筑豊石炭鉱業会となり訓練所は同会救護訓練所と改称されました。こまでは訓練所の建物は会議所の一部を使用しいわば間借りをしていたので、十分な訓練練習ができなかったので福田所長と当時救護訓練主任であった河野敏氏のお骨折りにより、練習所専用の建物を新築する事になり

昭和九年一一月に出来あがったのが、現在のたてものであります。私、毛利は昭和一二年に退職された河野敏主任の代わってまいりました。河野氏は現在貝島炭礦東京支店におられるのでありますが、昭和六年に三菱方城炭鉱から来られ福田、横尾の所長を助けて現在の救護所の基礎を作られたと言っても過言ではない名主任であります。その功績に報いるためいささかの記念品を協会からお贈りすることになっております。

ここに出てくる記念品が我が家に残っている教護隊のブロンズ像と思われる。このブロンズ像はいずれ直方石炭記念館に寄贈して長く保存してもらいたいと考えている。母キヌによれば父敏がモデルになったと言う。また、平成二三年末に拓夫がこの記念館を訪れた際には、父敏が写っている集合写真が記念館の壁に掛かっているのも発見した。以下は、同じくこの『記念誌』から大正一三年から昭和二二年までの長きにわたり、炭鉱災害予防に尽力され表彰された中西信氏（元救護練習所長）の言葉を引用する。

先日、あの記念式典に福田先生がおられなかったこと…これはいくら追憶してもお迎えする事は出来ませんが…また河野君の顔が見えなかった事は寂しい感じがしました。末次所長さんの時代に河野君が転出されることになり「ここの仕事は誰でもいきなり来てすぐできると言うものではない。仕事に詳しい熱心な人がこう引き抜かれるようではどうにもならない困った事だがよい知恵はないか」、「ここの仕事は練習をやるだけのような呑気な仕事ではなく、万一の場合には坑内の救護隊本部に詰めて隊の指導もやり、時には陣頭に立たなければならない大切な仕事です。つまり隊の訓練は命がけの重要な仕事であります。それで充分の待遇をしてあげるのでなければならないのに、従来は若松の組合事務所の人などに比較して甚だしく俸給や賞与も劣っている現状では立派な人を迎える事は出来ないでしょう。まず立派な人を迎えるに礼を以てすべきで、それさえよくされたならば人物はあると思います」と申し上げた次第であります。

直方時代は昭和六年から十二年までの六年間の短い間だったが拓夫、展子、耕造の三人の子供が生まれている。拓夫は昭和六年九月一九日、直方南小学校の正門前の家で生まれた。展子は昭和九年一月四日、耕造は昭和一一年六月一三日。いずれも直方の新町で生まれた。前に引用した文章にもあるように直方時代は給料が少なかったらしい。それで貝島炭礦に引き抜かれた一つの原因らしい。

貝島炭礦の北支那進出の背景

昭和一二年七月七日、盧溝橋事件が勃発した。戦禍は次第に拡大し軍は長期戦に備え北支那の炭鉱を接収し、その高品質の強粘結炭（これは製鉄用コークスを製造するには欠かせない石炭）を八幡製鉄所に運び鉄鋼生産に役立てたいと考え、その業務を興中公司（国策会社）に委嘱した。一方では国内の主だった炭鉱主はこの際、内地に留まらず大陸に進出したいと考え、機会を狙っていた。中央軍部はまず貝島に打診した。貝島太市氏は欣然として応諾、三井、三菱に先んじて昭和一二年一一月、戦

塵いまだ収まらない北支那へ第一次派遣を実行した。その団員名は以下の通り。

団長　草場義夫　　副団長　満永寅一
隊員　稲川大助（一ヶ月後帰国）
隊員　宮島庚子郎井陘炭砿長
隊員　河野敏正豊炭砿長
隊員　後藤理夫

以上六名

このような経緯から推察するに貝島炭礦は採炭の現場に詳しく、しかも旅順工科学堂に学び中国語も分かる河野敏に目をつけ、救護練習所から引き抜いたものと思われる。この辺りの事情については畠中茂朗著『貝島炭礦の盛衰と経営戦略』（二〇一〇年出版）、一八七頁以降に詳しい。

第一陣は昭和一二年一一月七日に門司を出発し、九日に大連に到着。その後、北京で事務手続きを行ない軍の嘱託となった上で、正豊炭砿には昭和一二年（一九三七）一二月に到着した。

井陘炭砿は一八九六年、ドイツ人ハイネッケンと中国人張鳳起等によって開発されたが紆余曲折を経て一九二三年（第一次世界大戦後）、ドイツ側三分の一、中国側三分の二の出資の四五〇万元の資本金で本格的な採炭が行われた。井陘炭砿は正豊炭砿を含む総称である。一九三五年の出炭は七八万トン余りだった。

治安不安定だったため家族は数年遅れ、昭和一五年ころ現地に到着したと推測する。ドイツ人との合弁だった名残として我々河野家族の現地での住居は瀟洒な石造りの大きな洋館だった（地下一階地上二階、広いベランダ付き）。全館スチーム暖房設備があったし、地下にはボーリング場が一レーンあった。小間使いのボーイの他、中国人の爺さんと婆さんが住みこんでいた。住居の周りには葡萄棚があり、季節になると緑色のマスカットが鈴なりになっていたし、畑にはトマトが植えてあり、拓夫はここでトマトの本当の味を知った。いまこの味のトマトには日本では出会えない。かろうじて完熟トマトがこれに近いかと思う。

前掲『貝島炭礦の盛衰と経営戦略』の記述によると昭和一五年（一九四〇）九月、井陘・正豊両炭砿に日本人小学校を開設するため清賀篤之・西島昇の両先生が着任している。これは我々日本人子弟のために派遣されたもので、その後、上田英雄先生が着任した。上田先生は拓夫専任で一対一の授業だった。このお陰で拓夫の学力は向上した。先生は拓夫帰国後にトラックで移動中に匪賊に襲われ亡くなったと聞く。記録によれば井陘炭砿の方には日本人学校があり二三〇人の生徒が居たとなっているが、その記憶はないし交流も無かった。おそらく我々が帰国した後、終戦直前のことだろう。

昭和一六年一二月八日、日本は米国に対して宣戦を布告し太平洋戦争が始まった。当時、拓夫が覚えていのは中国人通訳の女性（馬マーさん）が心配そうな顔をして父敏に「日本はいま中国と戦争をしているのに、新たにアメリカと戦争を始めて大丈夫ですか？」と言っていたのを覚えている。

正豊炭砿の社宅群は高さ二mの煉瓦塀の上に電流を通じた有刺鉄線を

張りその壁の外に深さ二mの濠をめぐらし、濠の内、外にも電流を通した鉄条網を二重に張り巡らした中での生活だった。夜中に銃声が聞こえた事もある。また父が拳銃を肌身離さず持っていた事も覚えている。治安は非常に不安定で度々匪賊の攻撃を受けた。日本軍隊が警備のため配置されていたが不十分な体制だった。しかし、匪賊は正豊よりも規模の大きい本坑である井陘のほうを攻撃した。

正豊には拓夫、展子のほか古賀伸子、（秋田？）歌子の四人がいて中国人の小学校の一教室を借りて授業を受けた。拓夫は小学校の四年・五年をここで過ごした。上田先生と一対一の授業だったため学力は向上した。この間に弓道にも励んだ。中国人の小学生で同学年の〝常国華くん〟には一九九五～一九九八年ころ六〇年ぶりに再会したことがある。また父が炭砿長をしていた頃の事務所従業員にも会う事が出来た。その内の一人女子従業員だった女性（もう七五歳くらいだった）が言うには、「河野先生は大変優しい方でした。私は経理事務もやっていましたので物品の購入伝票にハンコをもらわなければなりませんでした。数字には厳しかったですが私には優しかった」。河野は終戦になって日本軍が武装解除された後、中国人管理者に炭鉱業務引き継ぎのためほぼ一年間残留したが、大切に取り扱われたようだ。

ここで宮島庚子郎井陘炭砿長が帰国した後（昭和三七年）に書かれた記録『井陘時代』から引用する。その冒頭には「謹んでこのさゝやかな記録を　国策の犠牲となつて　異境の土と化したはらからと　尊い生命を　職務のために捧げたともどちの　御霊に捧げる　昭和三十七年一月　宮島」と書かれている。

宮島庚子郎氏は、明治三三年（一九〇〇）に佐賀県唐津で生まれ、大正一四年東大工学部鉱山学科を卒業、同年に貝島炭礦へ入社。父敏は一九〇一年生まれだから宮島さんは一才年上となる。宮島さんは唐津市の宮島醤油の一族である。宮島氏が帰国後に書いた『井陘時代』を読むと当時の治安状況がいかに不安定だったかが分かる。北京～石家荘～井陘の鉄道輸送ルートは日本軍隊によって守られていたが、宮島さんも父敏もたびたび途中で襲撃にあった事が記されている。参考として一部抜粋する。

たぶん昭和一四年の事だと思う。河野敏さんと北京へ出張した。滞京数日明日は一緒に炭鉱に帰ろうという日にどちらともなくこんな相談を始めた。「明日は草場さん（二人の上司）ご夫婦がわれわれと同じ汽車で井陘に行かれるそうだ」、「ご夫妻のお供は辛いね。いっそのこと今夜の夜行で発ってしまおうか」、「よかろう、夜行列車ももう半年あまり無事のようだから大丈夫だろう」、決して二人は一等寝台のコンパートメントに入ってぐっすり寝込んでいた。すると真夜中に一大音響とともに急停車、私は床の上に投げ出された。同時に機関銃の音、手榴弾の炸裂音、その度に窓ガラスが真っ赤に光った。車掌は素早く電灯を消して寝台の下にひそんでいた。ずいぶん長かったが、三〇分も経たろうか、いやもっと短かったろうか、敵は数一〇メートルまで近寄ったが車中に侵入することなくやがて退散した。私たち暗い車中でじっと夜明けを待った。夜が明けてから警備隊が来た。出て見ると機関車は脱線転覆し続く三両が折り重なって転覆していた。場所は保定と石門（石家荘）の間、漕河という小駅の近くだった。幸いわれわれの乗っていた一等車は後尾

に近かったので転覆もせず敵弾も被らなかったのだ。私たちは軍のトラックでその日の無事を喜ぶとともに「やっぱり悪いことはできんのう」と苦笑を交わした。

昭和一八年（一九四三）の春、家族（母キヌ、長男拓夫、次女展子、次男耕造）は日本へ帰国した。理由は拓夫が日本の中学校を受験するため日本の小学校卒業の資格を取る必要があったと聞いているが、実情は太平洋戦争の成り行きが危うくなってきた事が大きな理由だったと思う。これは父の英断だった。

その結果、敗戦後の厳しい状態での引き揚げを回避できたのは幸運だった。長女浩子は東京の自由学園に在学していたため終戦後、杵築で合流した。父敏の郷里は杵築だったが親戚は既に住んでなく借家を転々とした。正覚寺（河野家の菩提寺）、南台、宗近、大池など…。母方の実家である宇都宮家は別府にある宇都宮種八商店で、海産物問屋を経営し温泉付き旅館と別府市からの委託温泉も経営していた。我々家族が別府に帰らなかった理由について母は、「別府は関西の富裕層が稼いだお金を遊興に使う所で、子供の教育にはふさわしくない」と言っていた。思えば拓夫が生まれたのは直方南小学校の正門前だったし、その後、小学校に上がったのは下関市立文関小学校だったが、家は道を挟んで運動場のすぐ隣だった。孟母三遷の言葉を思い出す。

宮田時代

昭和二一年七月、父敏帰国。父敏は終戦後中国人経営者に炭鉱の引き継ぎをするため、ほぼ一年間残留し昭和二一年の七月に帰国した。荷物はリュックサック一個と靴下を一足（この中にはコメが一杯詰まっていた。内地は食糧が不足しているとの話が伝わってきたからと父は話していた）であった。父敏が引き揚げてくる前すなわち昭和二〇～二一年、浩子は北杵築に軍務（北海道に駐留）から帰還していた西文夫と結婚した。

昭和二一年（一九四六）に引き上げて来た父敏は派遣元の貝島炭礦に出頭し仕事を始めた。家族は翌年宮田町にあった春日寮（元料亭だった家を貝島が買い取って社宅としていた）に引っ越した。しばらくして国鉄宮田線宮田駅のそばの杉坂社宅に引っ越した。ここから子供達はそれぞれの学校に通った。

外地勤務から引き揚げて来た父敏は貝島炭礦では恵まれた扱いを受けなかったと思う。貝島としても内地勤務者が既にいてポストは満員の状態だった。父敏は昭和二四年八月一三日付けで、貝島炭礦東京事務所次長へ転勤となり家族と共に引っ越した（東京都板橋区）。拓夫は鞍手高校三年在学中だったが、急遽担任の日高寛先生の自宅（中泉）に預けられた。戦後の食糧の乏しいなか、拓夫は我が子同様の扱いで大切に扱われ、翌春、東京大学理科Ｉ類に合格することが出来た。

貝島炭礦の東京事務所は赤煉瓦造りの三菱廿一号館にあり、父敏の仕事は通商産業省関連でおそらく陰りの見えはじめた石炭産業に対する国の援助に関するものだったと推測する。

父敏は昭和二八年に貝島炭礦の本社のあった福岡に転勤となり、福岡市藤崎の社宅に引っ越した。拓夫は東大最後の一年は、東京女子大二年生の展子と二人で世田谷区代田に部屋を借りて自炊生活をした。

貝島七〇周年誌編纂委員会

貝島炭礦では貝島太助が開坑を決意したと言われている一八八五年から数えて、一九五五年（昭和三〇）に七〇周年を迎える事から、これを記念して社史編纂を計画した。父敏は社長室勤務となり、この委員会にメンバーとして名を連ねた。

畠中茂朗著「貝島炭礦研究史序論」によれば、「河野敏氏の初稿は原稿用紙に鉛筆あるいはペン書きされたもので、創業から戦後までを七期に区分して執筆されているが、戦後については未完で終わっている」となっている。この自筆の原稿は宮田町（現在の宮若市）の石炭記念館の倉庫に眠っているらしい。一度見たいと思っている。

貝島七〇年誌は昭和二九年（一九五四）春には完成の予定だったが現在（二〇一二年）に至るまで刊行されていない。おそらく本体の貝島が苦境に陥ったためと思われる。この影響もあり、父敏は五四歳で早期退職させられたらしい（当時は五五歳が定年だった）。拓夫が大学を卒業して帰省したのは退職後父敏が自分で買った福岡市大橋の自宅だったようにおぼえている。

昭和四〇年（一九六五年、六五歳の時）父敏は大橋の家を売って海老津に土地を買い自宅を建てて老後を過ごすことになる。拓夫が昭和二九年に八幡製鉄に就職したあと、昭和三四年に結婚し八幡に住む事になったので、少しでも近い所に住みたいとの気持ちがあったからだろう。浪人中ある中小企業に一時期勤め、種子島あたりに出張したりしていたが長くは続かなかった。

昭和四三年（一九六八）弟耕造が大分の河野美津子と結婚。父敏は昭和四四年から三年間、岡垣町百合ヶ丘区長を勤める。当時は現役の延長でまだ元気でもあり、町民から信頼を得て、募金や公民館の建設に力を注いだ。しかし、八〇歳を越えた頃から元気がなくなりボケの症状が見られるようになった。最後の半年はねたきり状態となり一九八五年一月一三日、帰らぬ人となった。享年八五歳（満）だった。この間、母キヌと共に誠心誠意、手厚い看護をしてくれた美津子さん（弟の嫁）に心から感謝しつつこの拙い文章を締めくくることとする。

平成二三年（二〇一二）三月五日　　河野拓夫

河野拓夫御夫妻　（2012年3月20日）

左：筆者

参考文献

一　畠中茂朗著『貝島炭礦の盛衰と経営戦略』（花書院、二〇一〇年三月初版発行）

二　『直方救護所四拾周年記念誌』（九州石炭鉱業会、非売品、昭和二六年三月発行）

三　『石炭と炭鉱～一〇〇年の歴史を語る～』（直方市石炭記念館　案内パンフレット）

四　三輪宗弘（解説）「宮島庚子郎氏関連資料～井陘時代を中心に～」（『石炭研究資料叢書』第三一輯、九州大学記録資料館、二〇〇九年）

五　宮島庚子郎著『井陘時代』、私家版、昭和三七年

六　畠中茂朗著「貝島炭礦研究史序論」（『九州国際大学社会文化研究所紀要』第五〇号、平成一四年七月）

七　『直方救護練習所概要』（九州炭鉱救護隊連盟、昭和三六年一一月）